—水墨画・日本画に関する美術教育についてのアンケート—

アンケート結果報告書

新川　美湖

1. 調査概要

(1)アンケート調査の概要

2008 年度の学習指導要領の改訂以降、美術科教育では「美術文化の継承と創造への関心を高める」という姿勢が「鑑賞」と「表現」両面で重視されるようになりました。これを受けて、近年の教科書では日本の絵画を「鑑賞」できる掲載量は増加し、「表現」では特に墨を扱った題材の掲載が定着しています。

この比較的新しい傾向に対して、現状の実態や課題を明らかにすることを目的として、東京都中学校美術科教員を対象に、本アンケート調査を実施させて頂きました。

項目	内容
調査期間	2020 年 2 月 3 日（月）～2020 年 3 月上旬
調査対象	東京都中学校美術教育研究会所属の常勤・非常勤教員 ＊学校長・副校長は授業担当がないと考え対象外としました。
調査内容	各校における 2019 年度の美術科実施内容
調査方法	封書にてアンケート用紙への回答を依頼
回収方法	郵送･FAX によるアンケート用紙の返送 メールアドレスへの返信
回収率	発送総数 540 通 ＊宛先不明により返送された 10 通は発送実数の 550 通から除きました。 回収総数 249 通　（回収率 46%） 分析対象 243 通 ＊実態の掴めない 6 通は分析対象から除外しました。
分析方法	アンケート用紙の単純集計・クロス集計

(2)回答者の概要

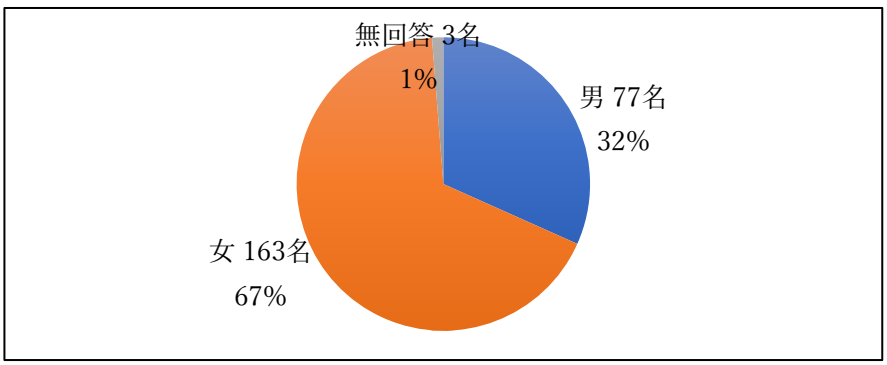


図 1-1　性別（243 名）

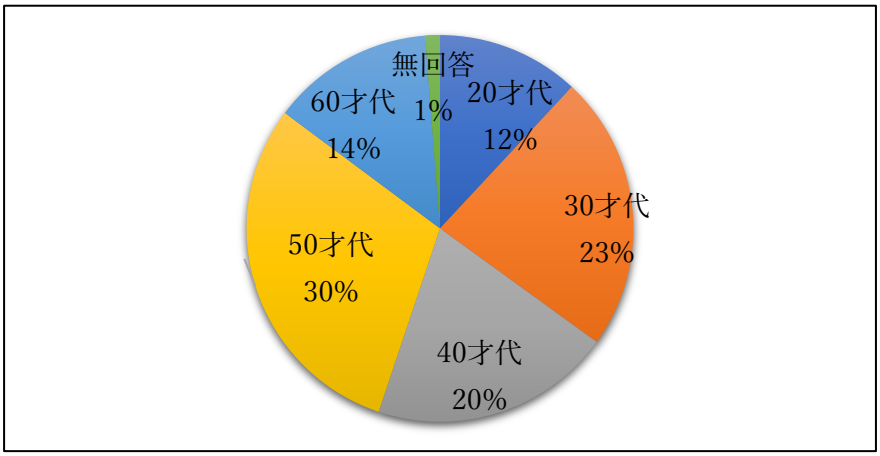


図 1-2　年代(2020.4.1 時点 243 名)

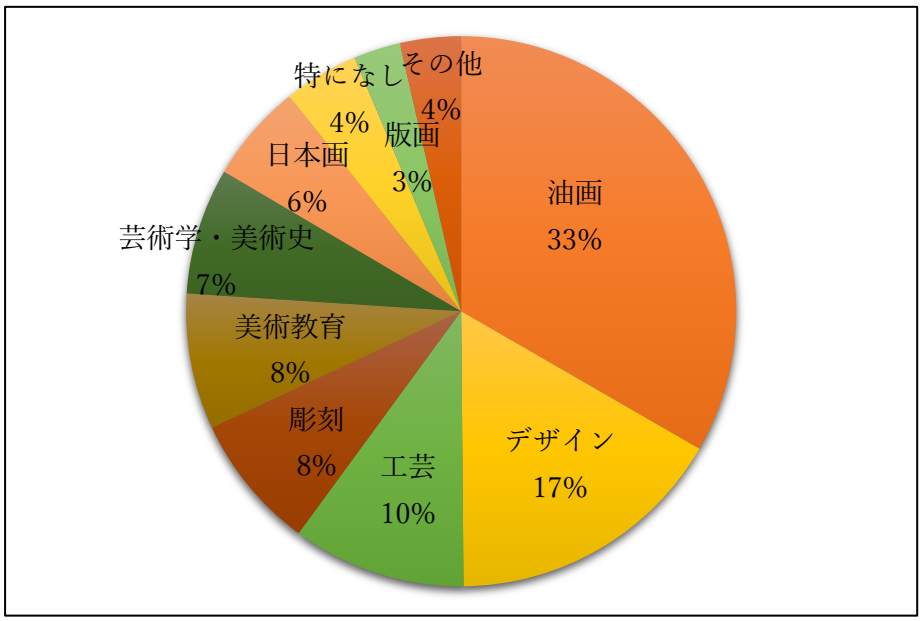


図 1-3　特に専門とする分野

＊複数回答は延べ数で算出しています。

2. 水墨画・日本画に関わる「鑑賞」授業の結果分析

(1)「鑑賞」の実施率

「鑑賞」の実施率は 81%（196/243 名）となりました（図 2-1,2-2）[1]。全体的な傾向としては、美術教育や美術史等を専門分野に持つ教員に高い実施率が見られた一方で（図 2-3）、男性と 40 代の教員では、女性や他の年代と比較して実施率が低くなりました（表 2-1,2-2, 図 2-4）。

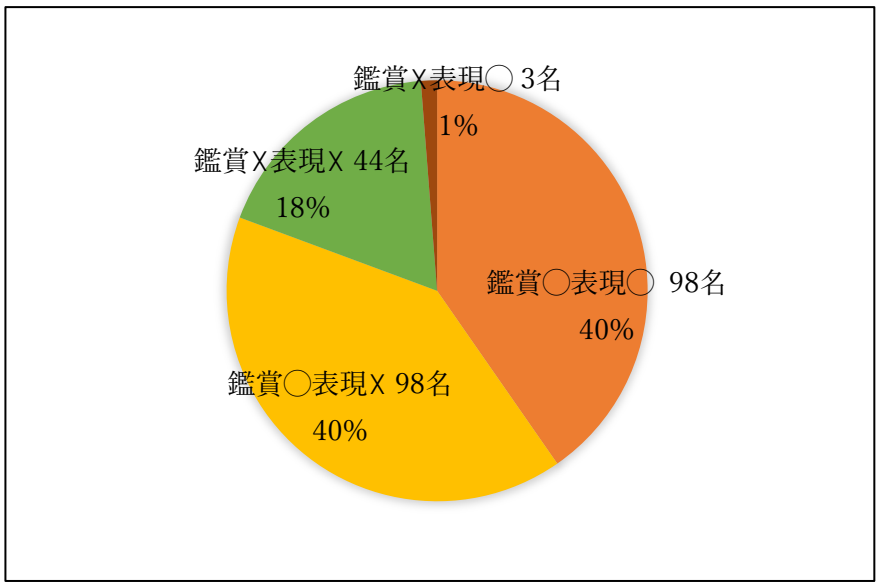


図 2-1 日本絵画に関わる「鑑賞」「表現」の実施率(243 名)

＊「○」は実践を行っている「X」は行っていないことを示します。

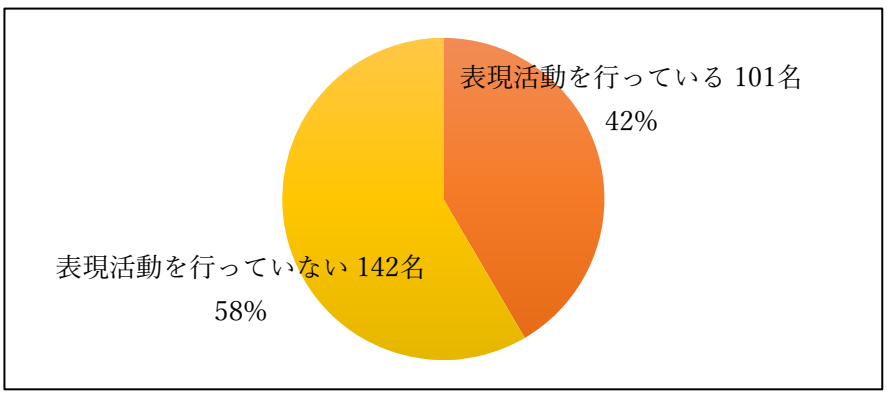


図 2-2 「鑑賞」実施率(243 名)

[1] 本調査では小数点以下第 1 位を四捨五入してパーセンテージ換算し、図示しています。このため合算すると 100%にならないことがあります。

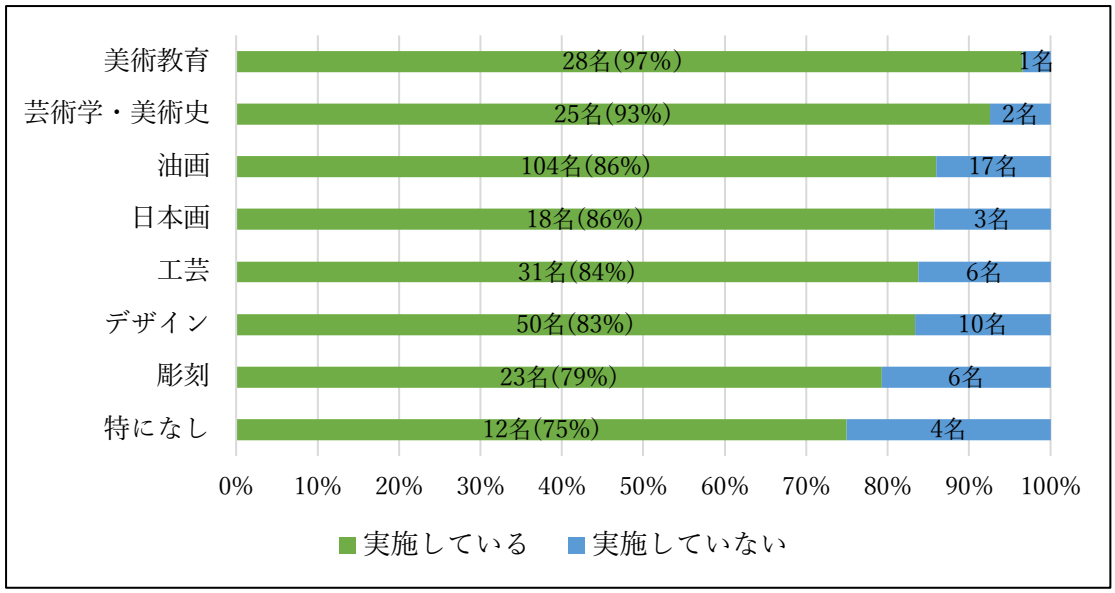


図 2-3　専門分野別「鑑賞」実施率

＊専門分野別回答者の母数に開きがあるため、横軸はパーセンテージ換算で図示しています。

表 2-1　男女比率に見る「鑑賞」実施率

	男	女	総数	総数に占める男性の比率
全体の人数	77 名	163 名	240 名	32%
「鑑賞」を実施している教員	57 名 (74%)	136 名 (83%)	193 名 (80%)	30%
「鑑賞」を実施していない教員	20 名 (26%)	27 名 (17%)	47 名 (19.5%)	43%

＊全体の総数 243 から性別不明の 3 名を引いた 240 名が対象。

表 2-2　年代別「鑑賞」実施率 I

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	無回答
全体の人数	29 名	57 名	48 名	73 名	33 名	3 名
「鑑賞」を実施している教員	22 名 (76%)	48 名 (84%)	36 名 (75%)	60 名 (82%)	27 名 (82%)	3 名 (100%)
「鑑賞」を実施していない教員	7 名 (24%)	9 名 (16%)	12 名 (25%)	13 名 (18%)	6 名 (18%)	0 名 (0%)

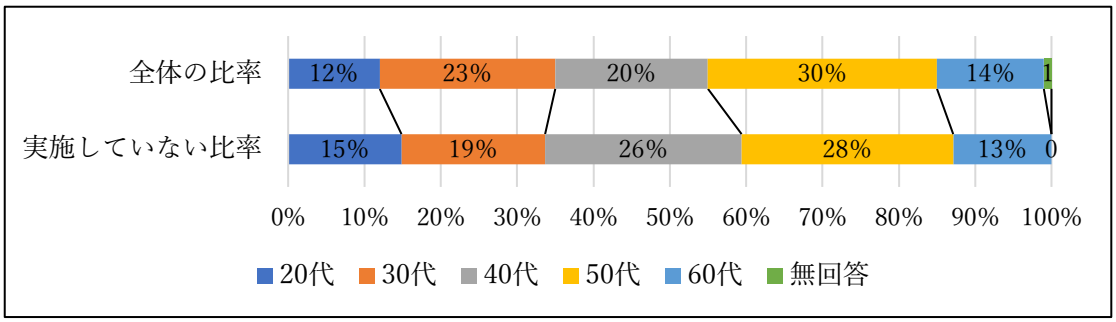


図 2-4　年代別「鑑賞」実施率 II

(2)「鑑賞」を実施しない要因

「鑑賞」を「行っていない」もしくは「以前行っていたがやめた」と回答した教員の実施しない要因を探っていくと、「授業時間不足」を挙げる回答が最も多く（図 2-6）なりました。

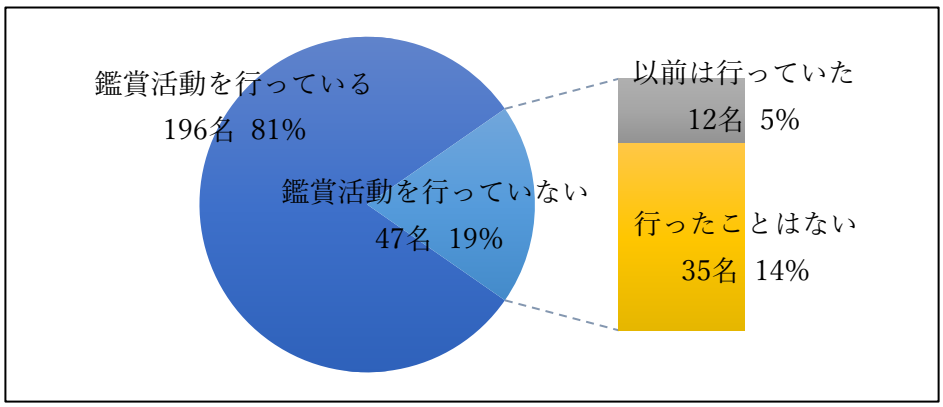


図 2-5　「鑑賞」実施率の内訳

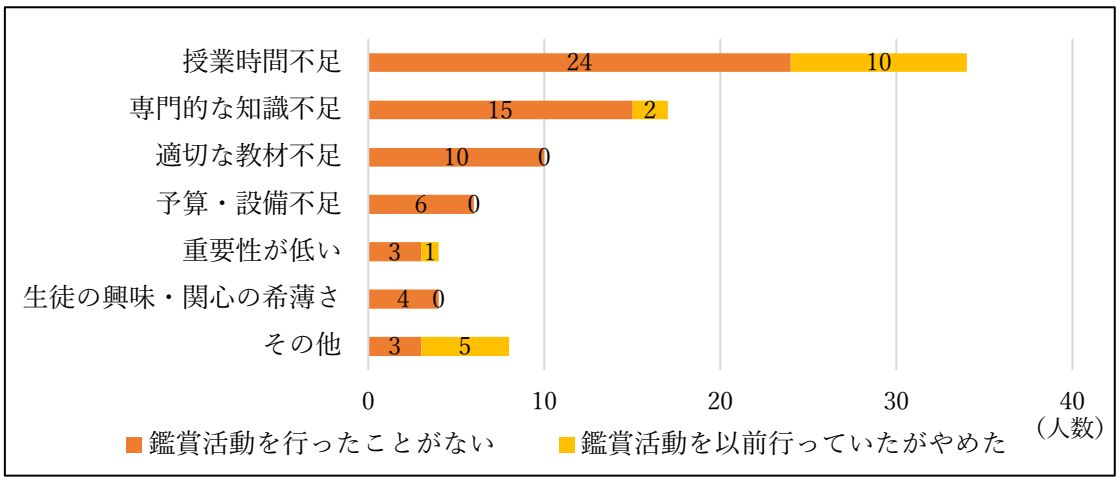


図 2-6「鑑賞」を実施しない理由

(3)「鑑賞」の実施内容

「鑑賞」の実施内容の特徴としては、俵屋宗達や尾形光琳などの美術科教科書に掲載される量の多い画家や作品に比例して、実際の教育現場でも取り扱われた頻度が高くなっていました（図 2-7）[2]。「活動場所」については、ほとんどの回答者は美術室であり、美術館施設の充実した東京都内の中学校においても、利用されている例は極めて少ないと分析できました（図 2-8）。「指導学年」については特に中学 2 年生の回答が多かったものの（図 2-9）、「指導時期」については学期の長さと連動しており、大きな特徴は見受けられませんでした（図 2-10）。また「授業時間数」は、約半数が 1~2 時間であり、3～4 時間以下の回答を含めると全体の 3 /4 近くを占めました（図 2-11）。つまり、日本の絵画に関わる「鑑賞」学習は比較的短時間で実施されている傾向にあると考えられます。

使用される「指導教材」については、「自作の資料・ワークシート」の回答が最も多く（図 2-12）、「必要な支援」の観点からも、「授業数の確保」以上に「適切な教材の開発」を求める回答が最多となりました（図 2-14）。つまり現状では、十分な「鑑賞」教材が開発されていないと感じている教員が多いと示唆されます。

一方で「鑑賞」を行う「主要な学習目的」としては、「自国文化理解」を挙げる回答が最も多くなりました（図 2-13）。しかし 2 番目に多い回答としては、「鑑賞」授業のみを独立して実施する教員は「美術史の知識」をより重視し、「表現」と合わせて総合的に実施する教員では、「表現法の広がり」をより重視して実施しているという差異が見受けられました。

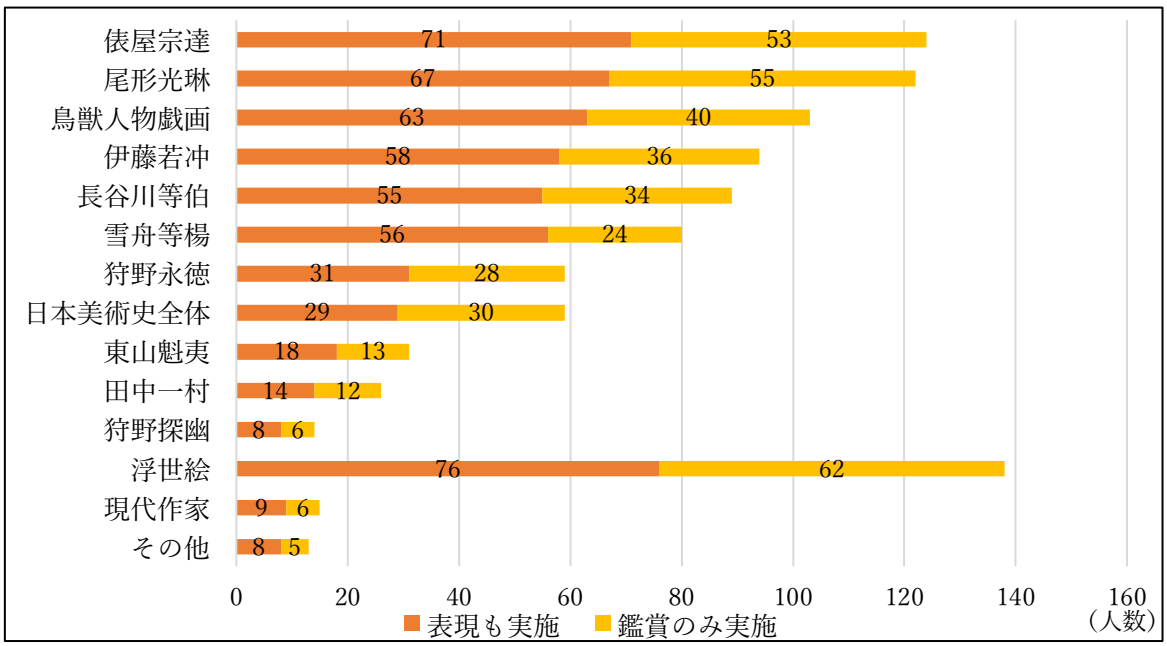


図 2-7　実施されている「鑑賞」授業の内容

[2] 葛飾北斎らによる「浮世絵版画」は「浮世絵」として集計しました。

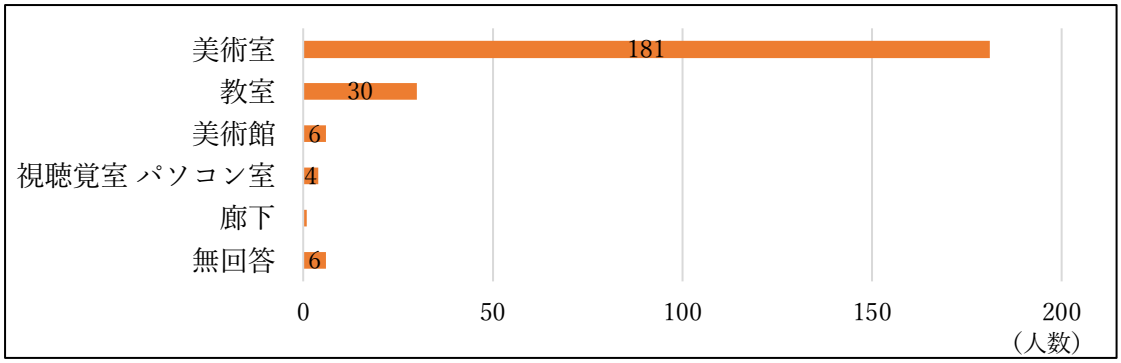


図 2-8「鑑賞」活動場所

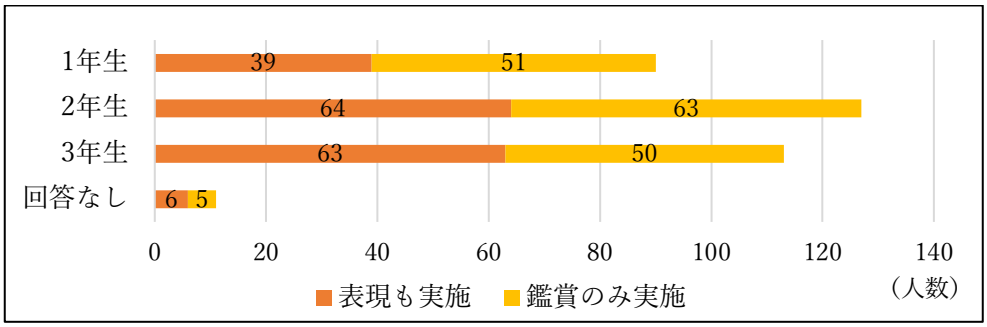


図 2-9「鑑賞」指導学年

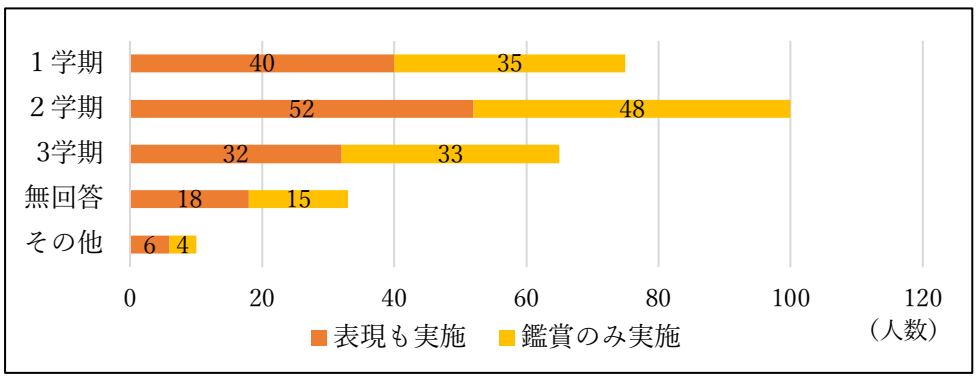


図 2-10「鑑賞」指導時期

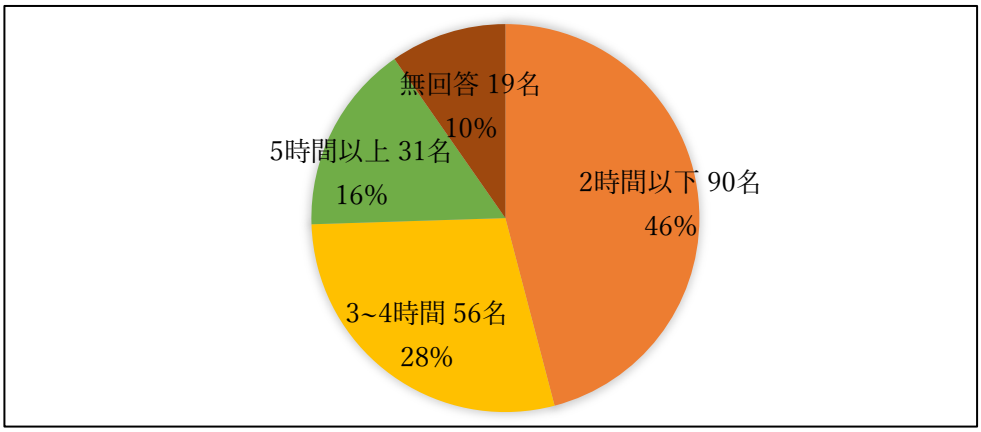


図 2-11「鑑賞」授業時間数

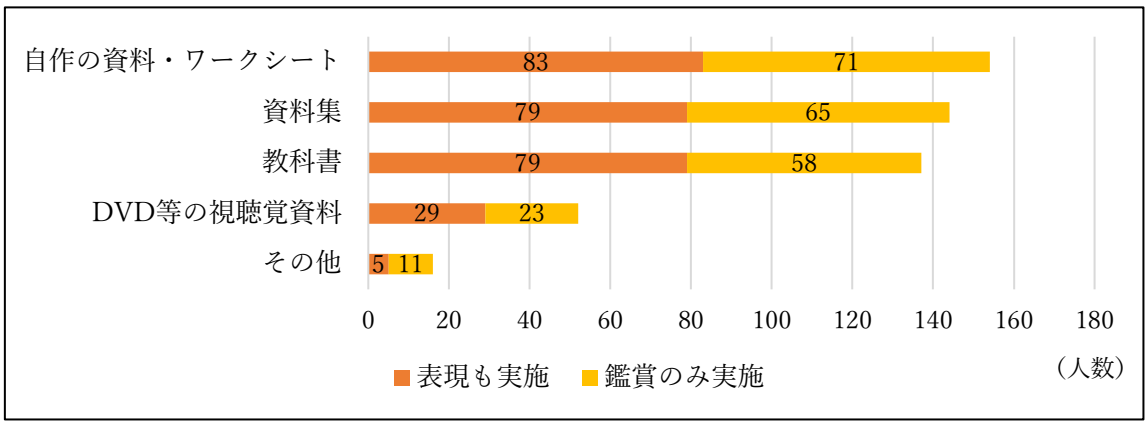


図 2-12「鑑賞」指導教材

＊複数学年で複数回、鑑賞の授業を行っている教員もおり、数値は延べ数となります。

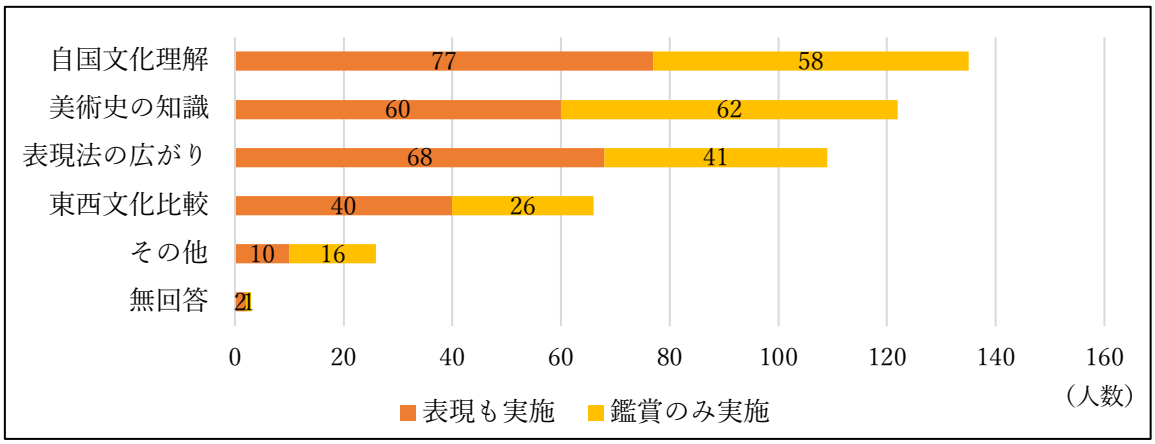


図 2-13「鑑賞」主要な学習目的

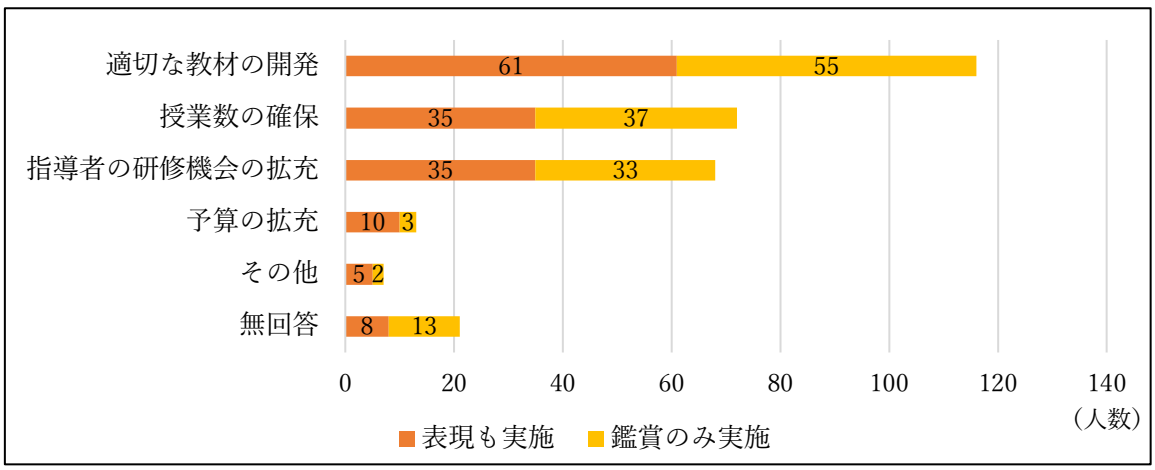


図 2-14「鑑賞」必要な支援

3. 水墨画・日本画に関わる「表現」授業の結果分析

(1)「表現」の実施率

「表現」の実施率は、「鑑賞」と比較して約半分の 42%（101/243 名）となりました（図 3-1）。しかし大きな特徴として、「表現」を「行っている」と回答した 101 名のうち 97%（98 名）は「鑑賞」も「行っている」と回答したことです（図 2-1）。一方で、表現活動のみを単独で行っていた回答者は極めて少ない 3 名となりました。さらに「表現」においても「美術教育」を主な専攻分野と回答した教員の実施率は、「鑑賞」と同様に最も高く、本来では日本の絵画の「表現」分野に近い、「日本画を専門とする教員」の平均値をも、大きく上回りました（図 3-2)。また性年代別の分析においては、ここでも男性と 40 代教員の実施率が、女性や他の年代と比較して低い結果となりました（表 3-1,3-2, 図 3-3）。

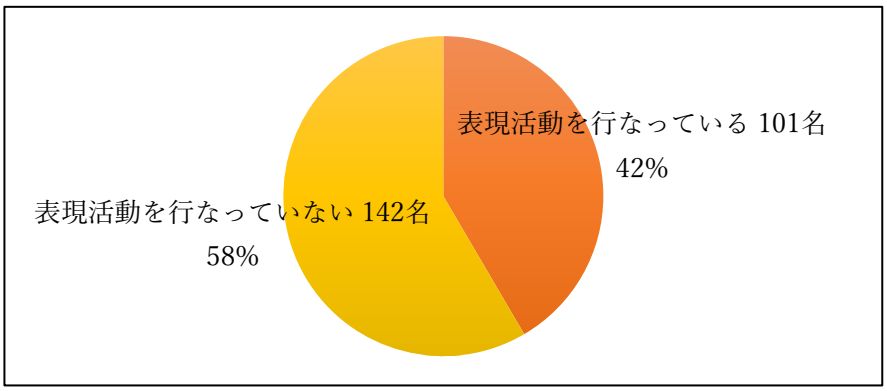


図 3-1　「表現」実施率　(243 名)

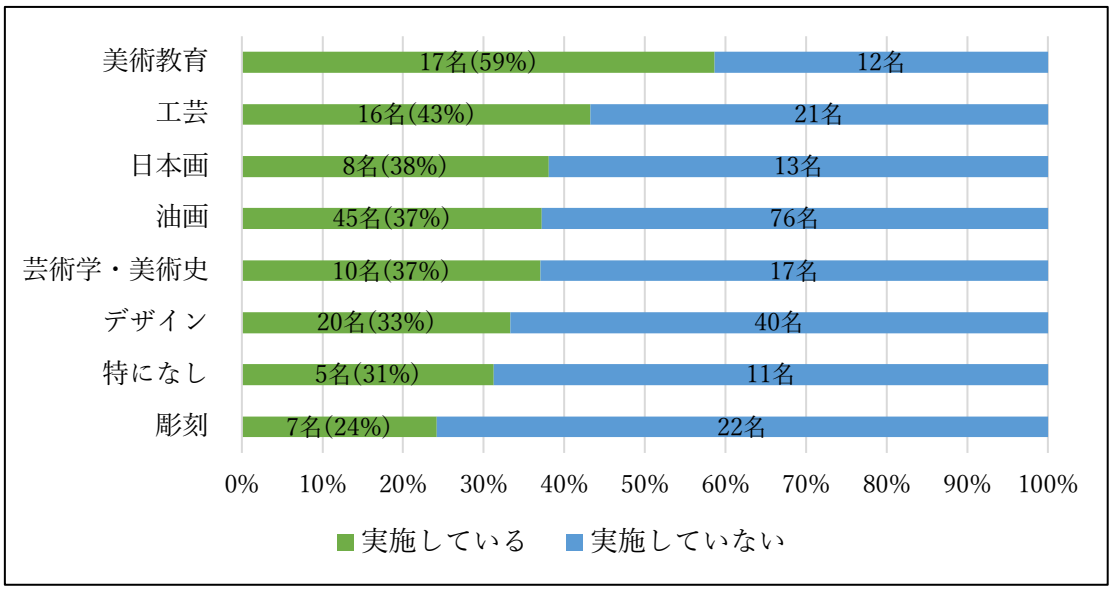


図 3-2　専門分野別「表現」の実施率

＊専門分野別回答者の母数に開きがあるため、横軸はパーセンテージ換算で図示しています。

表 3-1　男女比率にみる「表現」実施率

	男	女	総数	男性比率
全体の人数	77 名	163 名	240 名	32%
「表現」を実施している教員	25 名 (32%)	76 名 (47%)	101 名 (42%)	25%
「表現」を 実施していない教員	52 名 (68%)	87 名 (53%)	139 名 (58%)	37%

＊全体の総数 243 から性別不明の 3 名を引いた 240 名が対象です。

また実施している教員の年代が不明者 1 名おり、算出時の総数は 100 名となります。

表 3-2 年代別「表現」実施率 I

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	無回答
教員全体	29 名	57 名	48 名	73 名	33 名	3 名
「表現」を 実施している教員	14 名 (48%)	23 名 (40%)	14 名 (29%)	33 名 (45%)	16 名 (48%)	1 名 (33%)
「表現」を 実施していない教員	15 名 (52%)	34 名 (60%)	34 名 (71%)	40 名 (55%)	17 名 (52%)	2 名 (67%)

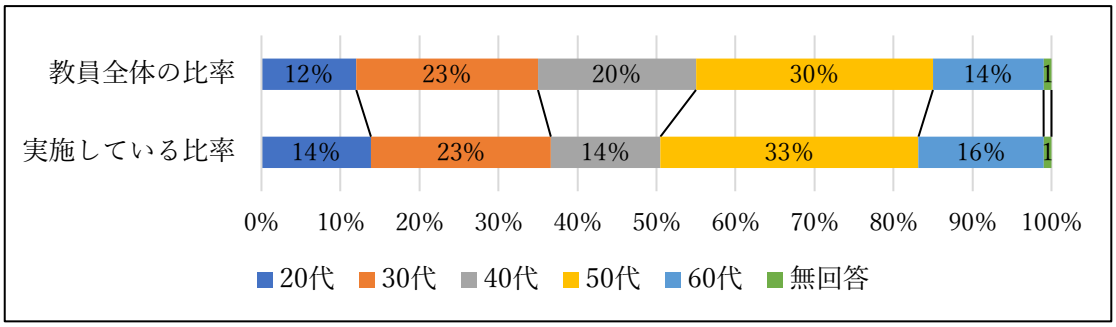


図 3-3　年代別「表現」実施率 II

(2)「表現」が実施されない要因

「表現」の授業を「行っていない」もしくは「以前は行っていた」と回答した教員の要因を探っていくと、ここでも「授業時間数不足」を挙げる回答が最も多く見られました（図 3-5）。しかし「表現」学習をこれまでに「行っていない」とした教員の回答のみを分析いくと、「専門的な経験の不足」が最も大きな要因であると言えます（図 3-6）。つまり、題材の「重要性」や「予算・設備不足」、「生徒の興味・関心の希薄さ」などが、導入を阻む大きな要因ではないと推測できます。

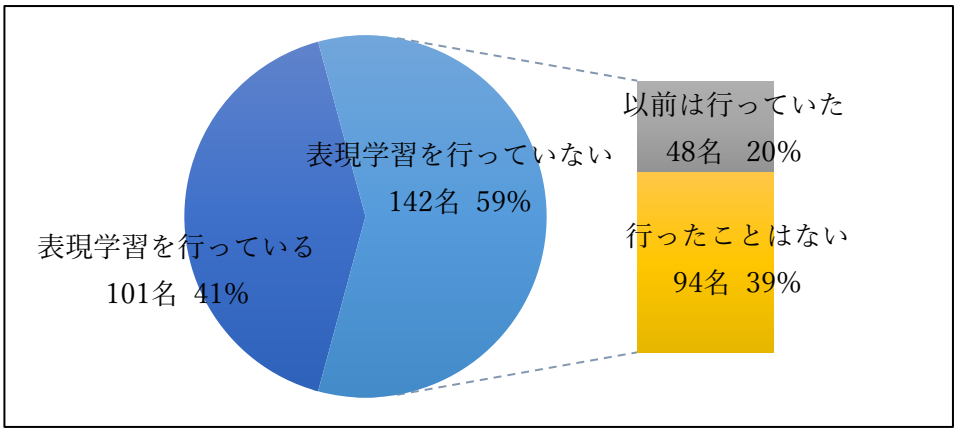


図 3-4　「表現」実施率の内訳

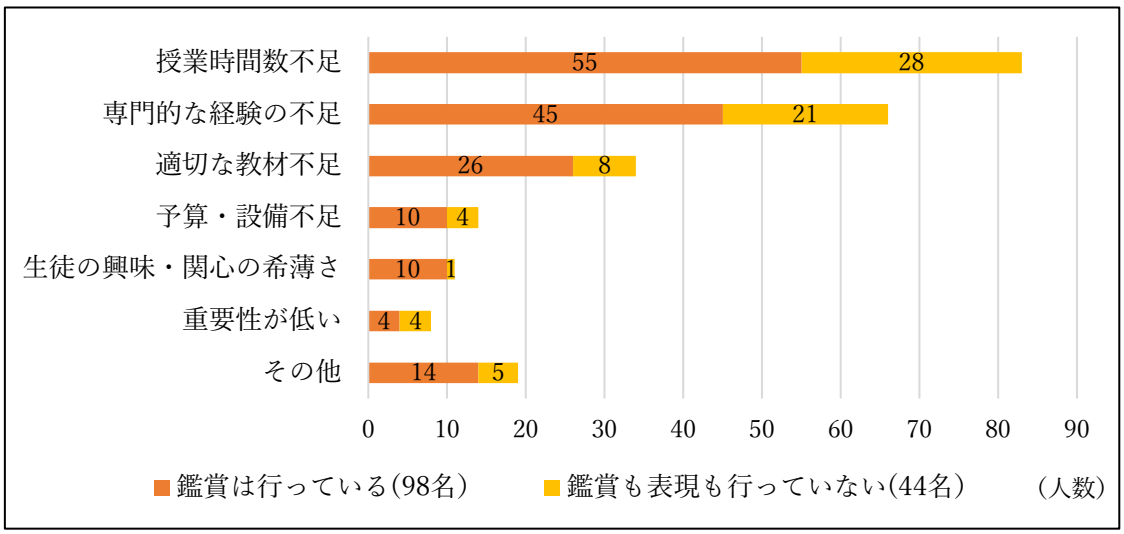


図 3-5「表現」を実施しない理由(142 名)

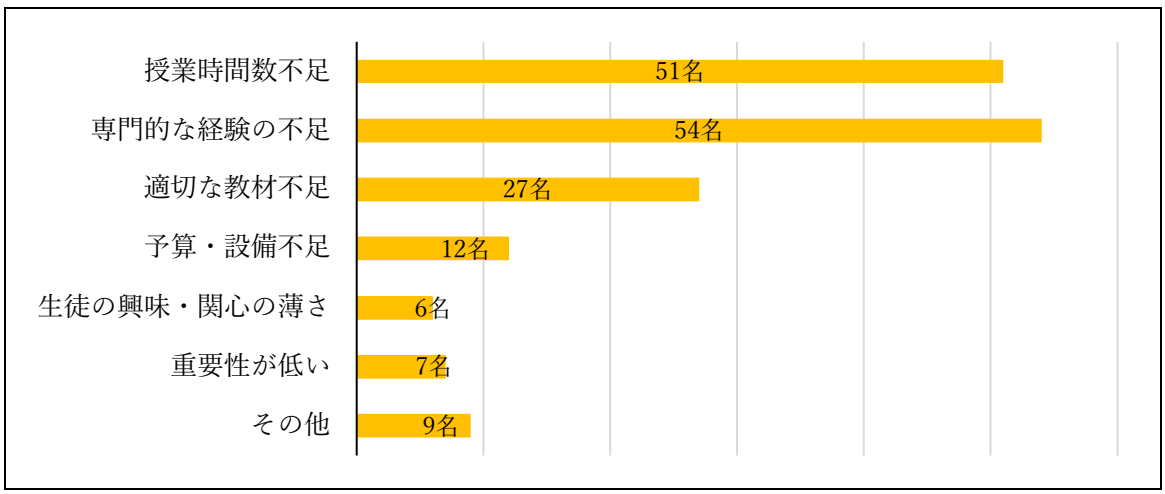


図 3-6　「表現」を「行ったことがない」回答者の実施しない理由（94 名）

(3)「表現」の実施内容

実施内容の特徴としては、使用する資料として「教科書」と「資料集」が最も多く回答されており、これらに掲載されている画像の影響が大きいと推測できます（図 3-7）。「活動場所」については、鑑賞と同様に「美術室」が圧倒的多数となりました（図 3-8）。また「指導学年」については、学年が上がるにつれて増加傾向が見られますが（図 3-9）、「指導時期」については学期の長さと連動しており、大きな特徴は見られませんでした（図 3-10）。

「授業時間数」については、3~4 時間、5～6 時間、7～10 時間の回答がそれぞれ約 3 割を占め、大きな傾向はなく、教師の裁量や力点に応じた幅広い題材の実施が、可能であると考えられました（図 3-11）。

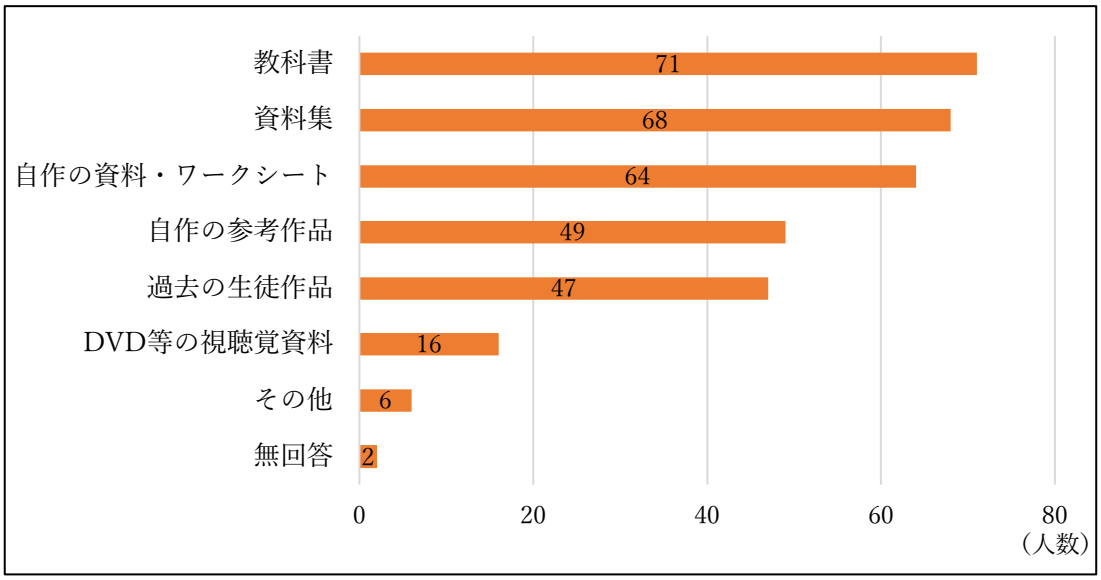


図 3-7　「表現」資料

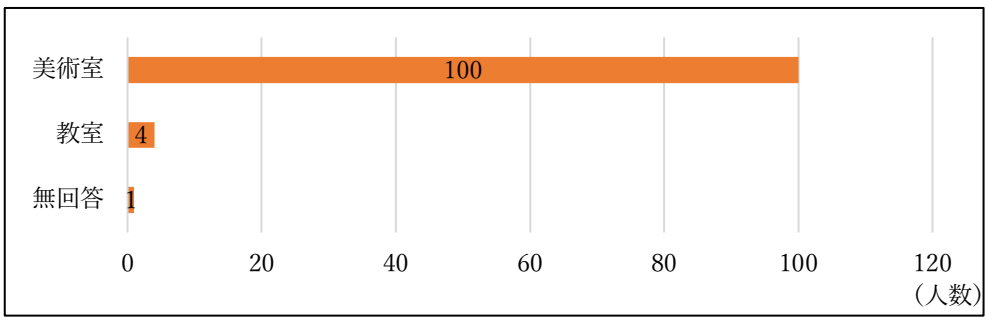


図 3-8「表現」活動場所

＊101 名（複数回答を含みます）

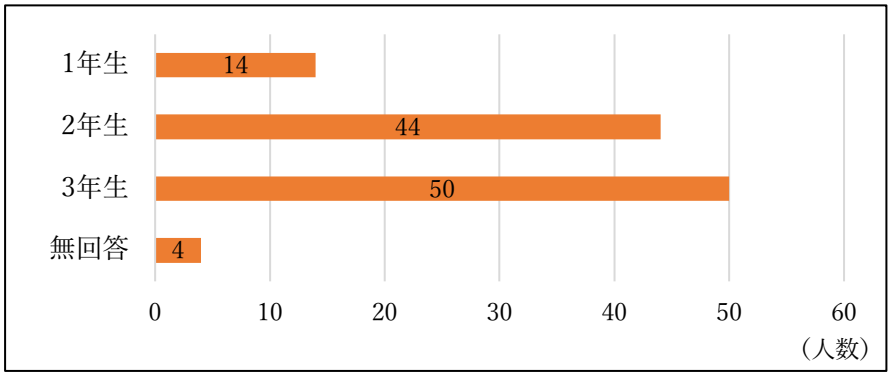


図 3-9「表現」実施学年

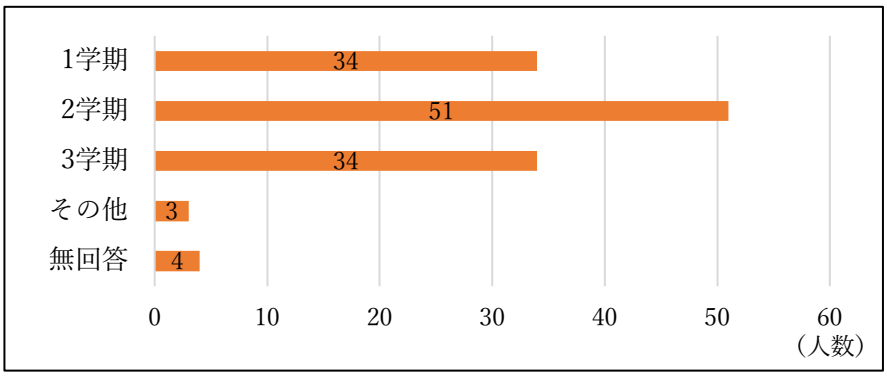


図 3-10「表現」実施時期

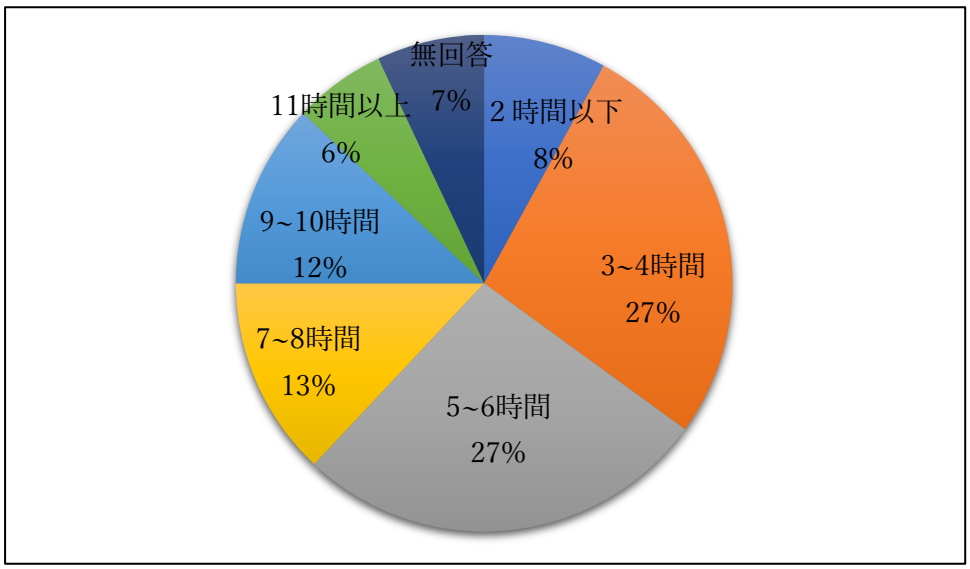


図 3-11「表現」授業時間数

「表現」内容の詳細な調査としては、墨を活動に取り入れて活動を行っているグループ「墨[3]・和紙[4]」「墨・和紙・画用紙[5]」「墨・画用紙」と、墨を使わないグループ「絵具・画用紙」「その他」に分けて分析したところ、前者の合計は 83%（85 名[6]）となりました（図 3-12）。つまり全体の回答総数である 243 名の、およそ 1/3 に相当する学校で何らかの墨を用いた「表現」学習が行われていると言えます[7]。さらに付け加えると、「表現」の 65%の活動内容が、墨のみであることも分析できました。

まず、「墨」を学習内容に取り入れているグループの傾向を詳細に分析すると「模写」が最も多く、特に「鳥獣戯画」を挙げた回答は 14 名となりました（表 3-3）。次に多い「自由画」は、内容が非常に多岐に渡る一方で特徴的な傾向は見られませんでした。

一方で、これまでの開隆堂出版の教科書では、日本画の岩絵の具を使用した「表現」題材が掲載されたこともありましたが、今回のアンケートでは、1 名が「砂絵セットの砂に膠を混ぜて、岩絵の具の代用にしている」と回答し、日本画に近い唯一の実践と考えられました。しかしその他の自由記述からは、「日本画はお金がかかるため、公立学校では実践出来ない」「日本画の経験はない」「日本画は時間がかかり難しい」といった意見が多く、金銭と技術の両面で導入が困難であることが示唆されました。

他方で、墨は使用せずに「表現」活動を行ったとする回答（18 名）もあり、何を重視して日本絵画の「表現」と定義するかもまた、教員の判断に広く委ねられていると考えられました[8]。

さらに、より詳しく使用画材を分析すると、「墨」ではなく「墨汁」が最も多く導入されていました。筆については「書道の筆」以上に、「絵の具の筆」が多く使われていました。使用された「画紙」や「紙の種類」の調査では、何らかの「和紙」を使用していると回答した教員は 6〜7 割近くおり、詳細にその中の「和紙」の種類を分析すると、「ドーサなしの紙」が最多となりました。一方で、「ドーサ引きの紙」を使用した教員もまた 3 割おり、これらの違いが「わからない」「無回答」の回答者を合算すると 2 割を超えていました。つまり画紙の種類一つをとっても、現状では多岐に渡っていると言えます。

---

[3] 「墨」「墨汁」を含みます。

[4] 「半紙」「色紙」「画仙紙」「水墨画用紙」「障子紙」「巻物」を含みます。

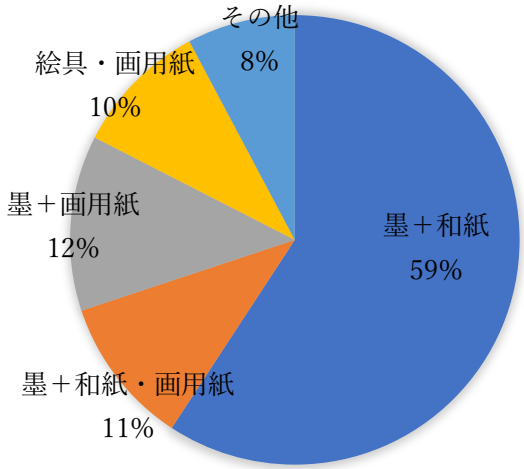
[5] 「コピー紙」「上質紙」「クロッキー帳の紙」「金屏風」に使用された板紙を含見ます。

[6] 1 名が墨を使用した活動を 2 つ回答したため、実践者数は 84 名となります。

[7] 2 名の教員は 2 種類の活動を扱っており、1 名は「墨＋和紙」と「墨＋和紙・西洋紙」の実践、残る 1 名は「墨＋和紙」「その他」の実践として計上しました。

[8] 北澤憲昭『眼の神殿「美術」受容史ノート』の出版を皮切りに、明治期に誕生した「日本画」は日本の「伝統」絵画ではないという論調もあります。

使用画材の内訳（単数回答 101 名＋複数の実践を回答した 2 名）



分類名	人数	内容
墨＋和紙	61 名	墨を使用し、水彩絵の具を使用している場合も含め、画紙には和紙のみを採用
墨＋和紙･画用紙	11 名	墨を使用し、水彩絵の具を使用している場合も含め、画紙には和紙と画用紙の双方を採用
墨＋画用紙	13 名	墨を使用し、水彩絵の具を使用している場合も含め、画紙には画用紙のみを採用
絵の具＋画用紙	10 名	墨を使用せず、水彩絵の具等で画用紙に日本的な絵を制作
その他	8 名	＊色鉛筆で絵巻物セットを使って「絵巻物」制作 ＊点描画による、日本画や浮世絵の模写 ＊障壁画の表現を取り入れて、金箔の表現を用いたコラージュによる「自画像」 ＊一版多色刷り版画「私の行ってみたい風景」 ＊筆ペン、サインペンを用いて画用紙に「アニメーション」 ＊プッシュカラーセット「金箔を使った日本画」 ＊プッシュステンド「四季を感じさせる」作品 シール式 ＊砂絵セットの砂に膠を混ぜて、岩絵の具の代用として制作

図 3-12　実施されている「表現」の内容

表 3-3　墨を用いた「表現」学習の「内容」

画紙	模写	自由	写生	風景	想像	抽象	描画材研究	画材体験	その他
和紙 61 名(15 名)	28 名 (4)	17 名 (4)	13 名 (5)	13 名 (5)	12 名 (2)	6 名 (0)	4 名 (1)	4 名 (0)	5 名 (4)
和紙・画用紙 11 名(9 名)	3 名 (2)	5 名 (5)	1 名 (1)	2 名 (1)	4 名 (4)	4 名 (4)	2 名 (2)	1 名 (1)	0 名 (0)
画用紙 13 名(6 名)	7 名 (2)	6 名 (3)	3 名 (1)	3 名 (0)	4 名 (3)	3 名 (2)	0 名 (0)	2 名 (1)	1 名 (1)
合計 85 名(30 名)	38 名 (8)	28 名 (12)	17 名 (7)	18 名 (6)	20 名 (9)	13 名 (6)	6 名 (3)	7 名 (2)	6 名 (5)

＊括弧内は絵の具等を併用して実践された内訳です。

表 3-4　墨を使う「表現」の題材の例

内容	墨を使った「表現」の主な題材名等
模写	「鳥獣人物戯画」「雪舟等楊」「長谷川等伯」「風神雷神図屏風」 「白隠 達磨図」「ひよこ」「岩」「パンダ」「椿」「竹」 美術資料集の作品　市販の水墨画の本
自由画	「心の中の花」「起承転結のある巻物」「未来の自分に贈る言葉」 「私の好きなもの」「好きな歌」「自分を表す一文字」
写生画	「野菜」「果物」「竹」「絵手紙」「夏みかん」「上履き」「イカ」「木」「葉」 「静物」「植物」「写真を使用」
風景画	「修学旅行等の風景」「日常の風景」「花鳥風月」「心に残る風景や場所」 「遠近感のある風景」「奥行きのある風景」「身の回りの風景」 「ふるさとに関する動植物」
想像画	「オリジナル鳥獣戯画」「私の富士山」「水と墨で表すお気に入りの世界」 「生き物」「一本の木」「流れるイメージ」の巻物　「対の神様」
抽象画	「心象風景」「感情を表す」「水・風」「オノマトペを表現」「光」 「自分の感情」「文字からのインスピレーション」「響き合う言葉と絵」
描画材研究	「墨の魅力から」「三墨法の習得」「濃淡を使い分けよう」
画材体験	「調墨・運筆」
その他	「百人一首」「ねぷた」「仏画」

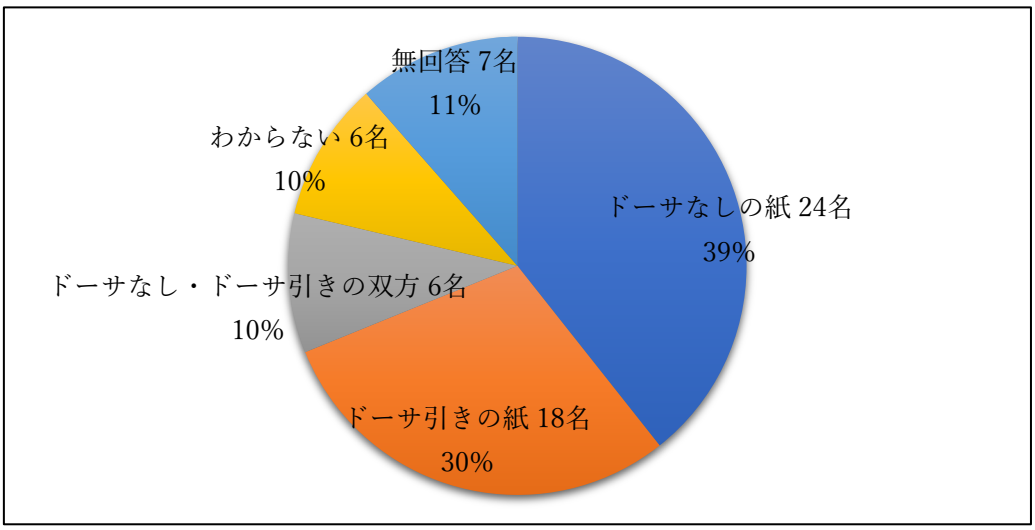


図 3-13　使用された「和紙」の種類（61 名）

表 3-5　墨を使わない「表現」の内容(18 名)

4 名	水彩絵の具を使って「金屏風」の制作。 ＊なお、「墨+画用紙」に含まれた活動の中でも、4 名が「金屏風[9]」を採用していました。
3 名	模写（内 2 名が浮世絵と回答しました。）
3 名	「絵の具 抽象 春夏秋冬」「水彩 生徒が自由に選ぶ」「絵の具 自画像 日本画的な表現に見える描き方を工夫」
8 名	その他

水墨画や日本画などの「表現」を実施する上で、最も「有効性の高い学び」は「濃淡表現」であると、教員側が捉えていることも分析できました（図 3-14）。とくに、墨のみによる「表現」活動を実践している教員ほどこの傾向は強く、さらに具体的な「筆使い」についても、有効性が高いと捉えている傾向が強くなりました（図 3-15）。

[9] 教材として市販される、金色のボード紙であると推定して集計してあります。

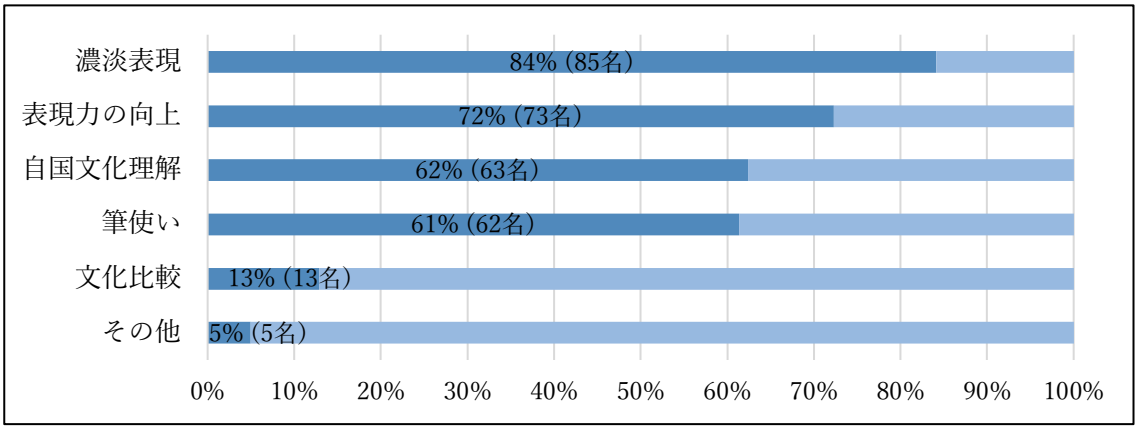


図 3-14「表現」活動の「有効性の高い学び」（101 名）

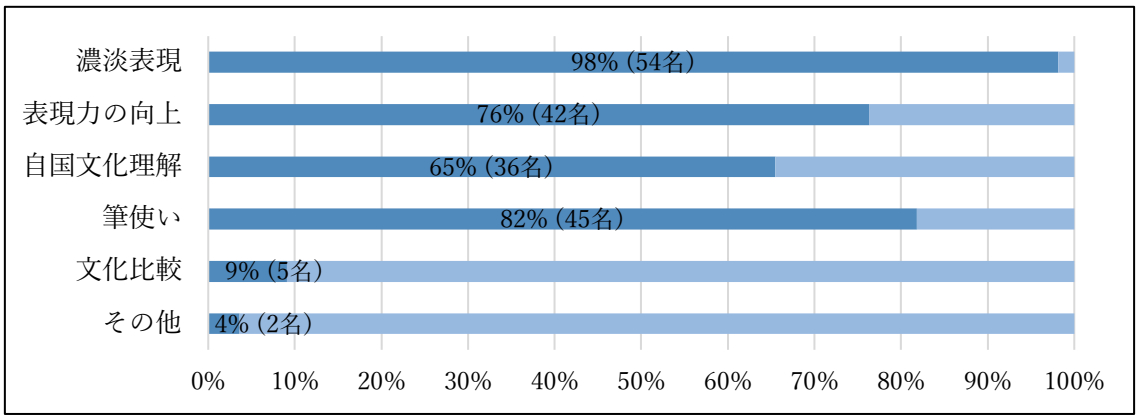


図 3-15「墨のみ」の表現活動を行った教員の感じる「有効性の高い学び」（55 名）

＊図 3-14, 3 -15 は回答者の母数に開きがあるため、横軸はパーセンテージ換算で図示しています。

「必要な支援」としては、「適切な教材の開発」を必要とする回答が最多となりました（図 3-16）。したがって、墨を扱う「表現」活動において現職教員は、「濃淡表現」や「筆使い」により「表現力の向上」が見込めるような「適切な教材の開発」を求めていると推測できます。次に多い回答となった「研究機会の拡充」についても、自由記述では「研修機会等が必要」「教員向けレクチャーがあれば嬉しい」といった内容の回答が 8 名から寄せられていました。

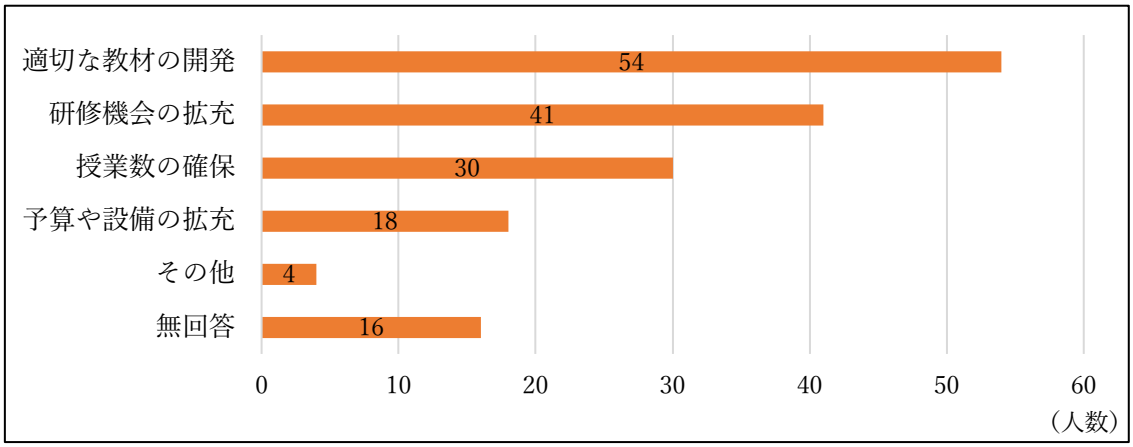


図 3-16「表現」活動に「必要な支援」

最後に、「表現」学習を行っていると回答した教員を対象に、「水墨画・日本画の表現活動は有意義である」「児童・生徒はこの活動に意欲的に取り組めている」「今後もこの活動を続けていきたい」の３つの設問を用意し、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の選択肢から回答をお願いしました。その結果、３つの質問ともに「あてはまらない」と回答した教員はおらず、「あまり当てはまらない」の回答も若干名にとどまりました（図 3-17）。

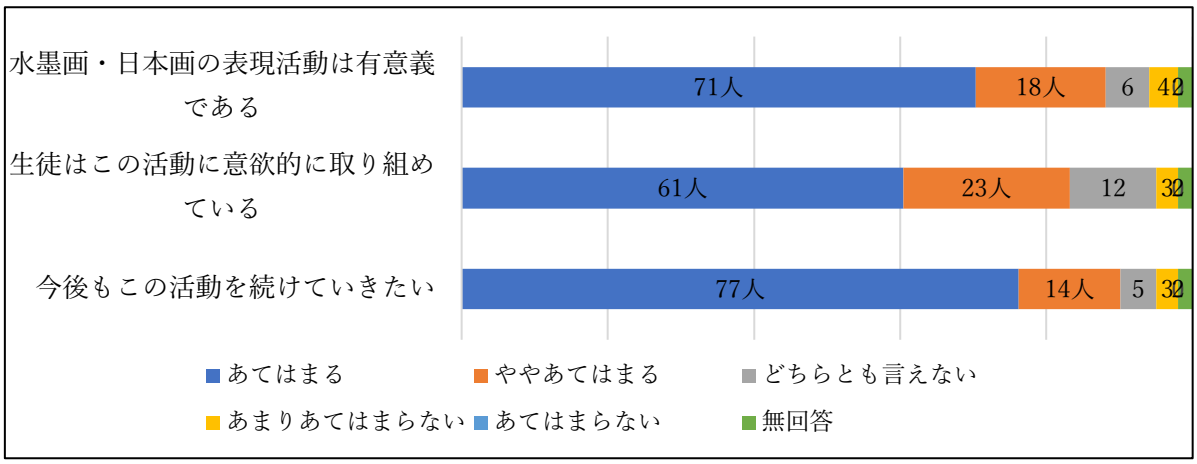


図 3-17　日本の絵画を学ぶ意義・生徒の意欲・教育の継続性（101 名）

4. 総合考察

(1)調査結果の考察

総体的に「鑑賞」学習においては、多くの現職教員は「自国文化理解」を目的として導入していますが、「適切な教材の不足」を強く感じていると言えました。自作の資料等を使用する教員が多いことや、デジタル教材の開発を求める意見が散見されたことからも、中学生向けの「鑑賞」学習の ICT 教材の開発は、今後の推進が強く期待される分野であると言えるでしょう。

「表現」学習においては、実践の意義・継続に意欲を感じ「行っている」とした教員が 4 割程度いる一方で、「授業時間数不足」や「専門的な経験の不足」などの要因から、「行っていない」とした教員が 6 割近くにのぼりました。後者からは、現実的な問題が解消されれば実施に前向きであるという意見が聞かれる一方で、「現在の時間数でカリキュラムに取り入れる必然性は弱く感じる」「日本の伝統と言ってもよいか疑問が残る」「組み込むには余裕がなく、大人数を一斉に授業するには内容にかなりの工夫がいる」「工芸分野でも良いと考える」といった否定的な意見も聞かれました。引き続き、現代において水墨画を含めた日本の絵画「表現」を学ぶ目的や意義を問い直し、学習内容を検討していく必要があると考えられます。

墨を扱う肯定的な意見としては、「静かな雰囲気がよい」「空間・空白・静の美を感じ取れる」「日本っぽさが出る」「味わいのある表現ができる」「概念を覆せる」「侘び寂びの精神を学べる」「写生的表現にも抽象的表現にも可能性がある」といった回答が見られました。つまり墨を用いた「表現」は、伝統的でありながらも生徒にとっては体験したことのない、新しい表現の発見をもたらす可能性を含んでいるとも考えられます。特に墨は「濃淡表現」において、最も「有効な学び」があると分析できました。「筆使い」などは、毛筆を使用した国語科の書写でも得ることができる一方で、「濃淡表現」は扱われません。したがって、美術科で墨を用いる際は、「濃淡表現」を重視する有効性が高いと考えられます。とくに水加減を生かした表現経験は、水彩絵の具を扱う際の表現力の向上も見込むこともできます。さらに「描かないこと」や「ぼかし」「にじみ」を利用することでも表現できるという、新しい発見や表現の工夫を生む可能性が示唆されます。また余白で「表現する」ということは、「わび・さび」など、もともと日本絵画が保有していた、表現の特質を再考するきっかけともなることが考えられます。今後はこれらの観点も加味しながら「適切な教材の開発」と「研修の機会の拡充」を推進することが必要とされている分野と言えるのではないでしょうか。

一方で、模写による「表現」学習が多い現状には、議論を深めていく必要があると捉えて

います。「臨画」が戦前に廃止された経緯を省みても、個人の創造性を重視した現在の教育法と、伝統的な模写を通した学習法は対極的と言えます。しかし模写を行っていた教員の自由記述からは、「線の美しさが学べる」「集中力が増す」「達成感が得やすい」「短時間で終わる」「筆使いが学べる」「濃淡が表現できるようになる」「手軽で安価」「表現の豊かさが伸びる」などの効果も挙げられていました。模写の内容と量について十分に検討し、結果的には現代の子供の創造性を導き出せるような、教材開発が必要であると考えます。

(2)今後の課題と展望

戦後の美術科教育では欧米型の表現方法が尊重され、日本在来の墨や和紙を用いた表現方法は、鉛筆や画用紙に代替されてきたと言えます。これは東京藝術大学をはじめとする専門的に日本画を学ぶ高等教育機関においても同様で、現在の日本画科の入学試験でも、西洋的な遠近法や鉛筆によるデッサン力の習得が重視されています。したがって、長年日本画制作を専門としてきた私にとっても、中学校美術科教科書に登場した水墨画の「表現」題材については、大きな戸惑いがありました。そして使用すべき紙や筆などの画材や、ごく初歩的な指導法から不透明であると感じました。

そこで 2022 年に私が博士号を取得した論文では、まず明治から現在までの間に、日本の伝統的な絵画に関わる教育がどのように変遷を遂げたかについて分析してまいりました。その上で本アンケート調査では、教育現場の皆様の現状の実態把握に努め、さらには貴重なご意見等を頂戴させていただく機会を得ることができ、研究に生かすことができました。現在では日本学術振興会より科学研究費を得て、水墨表現が体系的に維持されていた明治時代の毛筆画教育の内容の一部を、現代の「表現」に生かす研究を継続しています。その成果の一部は以下の HP サイトでも公開しております。

HP にほんの墨 ―Sumie & Nihonga―　明治時代の水墨画・日本画教育

https://meijinihonga.com

今後も同研究内容については継続的に探求してまいりますので、また別の機会にさらなる分析を経て、ご意見をお聞かせいただく機会がございましたら幸いです。

今回のアンケート調査では、調査研究の励みとなるようなご意見も数多く賜り、心より感謝しております。ご協力いただき、本当にありがとうございました。

—水墨画・日本画に関する美術教育についてのアンケート—
アンケート結果報告書

著者・発行者：新川　美湖

2024 年 3 月 31 日 発行
©新川　美湖